

～Communication～

七飯中学校 2年 二 瓶 颯 太

十月十一日、気がつけば七飯町に無事帰国していた。出発前にはあんなに心配なことばかりでくよくよしていた自分が、無事に研修を終えられた。これも、周囲の人達の支えのおかげで、自分の努力ではないと思っている。出発の五か月ほど前のある日がきっかけで、この研修へ参加した。

いつものように学校生活を送っていたある日、担任から数枚のプリントが配布された。その中に一枚、僕が気になったプリントがあり、内容を読んだ。海外交流研修についてのプリントだった。その時は、誰が希望するのかなあなんていった、人ごとのように考えていた。自分が希望するだなんて考えてもいなかった。ところが、これはチャンスなのではないか、ということに気がついた。両親に話をしたところ、参加するべきだ、と言われた。海外交流研修生の選考に落ちてもいい覚悟で申し込んだ。

僕他に、七人の希望者がいた。八人の中で海外交流研修に参加できるのは二人だけだった。この八人の中の六人が落ちることになる。絶対その六人の中の一人にはなりたくなかった。それに、僕はこの海外交流研修で、自分の心、視点、そしてこれからの人生を変えたかった。自分を変えてみせる、その思いで作文にありのままの自分と、変わりたいことを書いた。

作文を提出し、いよいよ面接だ。印象に残った質問があった。英語で質問された自分の趣味。いつもならパッと出てくる単語が出てこなかった。しかし、一応答えられた。他の質問は、緊張していてあまり覚えていない。

そして派遣者の発表の日、教室に希望者八人が入り、前に担当の先生が出てきた。一年生のころの僕の担任の先生で、前に出てきた瞬間、誰が選出されるかがわかった。先生が目がそう言っていたも同然だった。予想通り僕と高橋さんが選ばれた。

七月二十六日、派遣者全員がはじめて集まった記念の日だ。その日、一点気になった点があった。男子がいないということだ。でも僕は、女子の中に男子一人でも全然平気だ。しかし、大人の人たちは変に気を遣ってくれ、逆にその場に居辛かった。でもすぐに慣れた。

この日からだんだん集まる日も増え、あっという間に出発の日がきた。

空港で母は泣いていた。そして、手紙を僕に渡した。しかし、ここで母の手紙を読んだら、つられて泣いてしまう気がしたので、コンコードで読むことにした。すぐにみんなが来て、集合写真をとり、チェックインした。父もそのころ来た。ガラス越しに母が手を振って見送ってくれた。心細く、不安

でしかたがなかった。でも、飛行機の中でベンが話しかけてくれたりして、少しおちついた。

一時間ほどで、羽田空港へ着いた。そこからバスで成田ビューホテルまで行った。夕食を食べ、風呂へ行くと、いきなり英語で話しかけてきた中国人の人と、なんとなくしゃべっていた。英語があまり得意ではない僕は出身地と歳などしか答えられなかった。残念だったが、初日に英語に触れられて良かった。自宅に電話をかけ、すぐに寝た。

翌日、いよいよコンコードへ向けて出発する。飛行機で十三時間の長旅となる。この日は、不安もふつとび、楽しみだという気持ちだけでした。

あっという間にボストン空港に到着した。その日の日付は、日本から出発してきた時間とほぼ同じで、不思議だった。スクールバスでカーライル高校へ行き、日本語が話せるデイビット先生の指示を受けながら、ホストファミリーをさがした。そして、高校でピザを食べた。この時点で日本と違った。一切れが大きい。僕はいくらでも食べられるのですがみんな全然食べないので、四切れで食べるのを止め、その後、ホストファミリーの、母のキャロライン、姉のマーガレットが、むかえにきてくれていた。



家に着いて、部屋を案内してくれた。その後、サイクリングへ行こうと言われたので、とりあえず、イエス、と答えてみた。すると、ヘルメットと自転車、どちらも弟のクリストファーのものだった。クリストファーは、まだ学校から帰っていない。レッツゴーッ、と、パワフルなホ

ストマザー。とりあえずついていくと、アイスクリーム専門の店へ連れていってくれた。そこで僕は注文の仕方を勘違いしてしまったのだが、ホストファミリーは責めたりせずニコニコほほえんでくれていた。日本では、他人の失敗を責めるシーンをよく見かける。改めてアメリカの人の器の大きさを知った。僕も見習おうと思う。

アイスクリームを食べ、家に帰ると、父のダレンと、弟のクリストファーが帰ってきた。その日はクリストファーの手料理を食べた。その後すぐに寝た。

次の日はマーガレットと登校し、授業をうけてから昼食を食べ、残りの授業をこなして帰り、ダレンとクリストファーとバスケットボールでゲームをし、メカジキとステーキを夕食で食べ、眠くなったときに絵描き教室につれ

ていかれ、ぐしゃぐしゃな絵を描いていた。

次の日、ラジオ局で日本へメッセージを送った。夜はアメリカンフットボールへ連れていってもらった。

その次の日の休日、ボストンの街を歩き、みんなで食事をした。ハンバーガーを食べさせてもらった。また、公園を散歩したり、服を見たりと、丸一日をホストファミリーと過ごした。

そしてその翌日、今日が最終日。派遣者の人たちとボストンをまわり、家に帰ってボーリングへ行き、ワンピースの映画を見た。ダレンは出張で、カリフォルニアへ行くと言い、はやくに寝てしまった。

別れの日があつという間にきた。

涙をこらえ、思いきりみんなを抱きしめた。また会える。そう誓いながら、笑顔で彼らと別れた。

その後のボストン観光。気持ちを切り替えてとても楽しんだ。

ホテルでは、ベンと同じ部屋だった。夜遅くまで大人の人たちがお酒を飲んでた。その中でぽつんと一人、僕がいた。レッドソックスの試合を見た。この日、レッドソックスのマグカップを買いに、球場の近くへ行ったので、なおさら見たかった。地区優勝が決まったところで、寝た。



次の日、ボストンを後に、日本へ戻った。このときの十三時間、本当にあつという間だった。

日本のホテルですぐに寝て、明日にそなえた。

そして、羽田空港から函館へ。母が笑顔で待っていた。うれしかった。でも、もう少しコンコードに残りたかった。

家に帰る途中、寿司を食べ、“日本だ”と心がおちついた。家でみんなには写真や思い出話をした。家族のぬくもりをととても感じた。

この研修で学んだこと。人と人とのつながりの大切さを学んだ。英語は少ししかつたわらなくても、ホストファミリーが努力してくれたおかげで消極的にならずに済んだが、やっぱり言葉でのコミュニケーションの大切さをお

もい知った。

自分の課題を再確認することができたのは、研修に参加するにあたって周囲の人達のサポートがあったおかげです。

このつながりをムダにしないように、自分自身の課題を一つ一つこなしていきたい。

このような研修に参加することができて幸せでした。